

Pattern practice 再考 (2)

—授業の実例—

山口市立大内中学校 教諭 藤原 陽子

1 はじめに

藤原 (1998) においては、パターン・プラクティスに関する文献を概観し、その位置づけと今後の可能性について考察した。本稿においてはさらにその研究を継続させ、実践の場で効果的に生かしていく一つの方法を提案したい。指導手順の大きな流れは「前時の復習→新教材の導入→展開→整理」という過程である。パターン・プラクティスは、新教材導入の際の Aural drill、Mim-mem の後、理解を一層深め記憶に定着させることをねらう基本的な練習と、次の発展段階、例えばコミュニケーション練習への橋渡しをするという意義を持つ復習段階において行われる練習がある (名和・関, 1987 参照)。ここでは、復習段階における練習を取り上げてその技法を概観し、筆者が生徒に与えた cue について紹介することにする。

2 実践例

文法事項：現在時制 (三人称単数現在形)

以下、T: Teacher, C: Class, S1, S2, ... : Individual, #: Repetition, @: Attempted response を表す。

(1) 変形 (Variation)

「流暢に暗唱できるようになっている基本文の一部を変えて、別の文を作る」(飯野著、清水改訂, 1985)。

①置換 (Substitution)

「基本文中の特定の語を教師の与える cue によって、他の語句に置き換えて」(名和・関, 1987) 言う練習である。

[例]T: I play basketball.	C: (#)	↑	T: Kenta	C: (@)	↑	T: like	C: (@)	↓
T: soccer	C: (@)		T: I	C: (@)		T: baseball	C: (@)	
T: baseball	C: (@)		T: You	C: (@)		T: soccer	C: (@)	
T: tennis	C: (@)		T: Emi	C: (@)		T: tennis	C: (@)	
T: Aki	C: (@)		T: Midori	C: (@)		T: Your brother	C: (@)	
T: Jun	C: (@)	↓	T: I	C: (@)	↓			

②転換 (Conversion)

「基本文を教師の指示どおりに変えて」(名和・関, 1987) 言う練習である。

[例]T: Aki plays basketball.	C: (#)	↑	T: No.	C: (@)	↑	T: No.	C: (@)	↓
T: Question.	C: (@)		T: Yes.	C: (@)		T: Yes.	C: (@)	
T: No.	C: (@)		T: baseball	C: (@)		T: like	C: (@)	
T: Yes.	C: (@)		T: Question.	C: (@)		T: Question.	C: (@)	
T: soccer	C: (@)		T: You	C: (@)		T: No.	C: (@)	
T: Question.	C: (@)	↓	T: Jun	C: (@)	↓	T: Yes.	C: (@)	

③展開 (Expansion)

「基本文に、教師が与える cue にしたがって修飾語句を付け加えて」(名和・関, 1987) 言う練習である。

ア 前置修飾構造の練習

[例] T: Masao has apples in the bag. C: (#)
T: big C: (@)
T: a lot of C: (@)

イ 後置修飾構造の練習

[例] T: Masao plays tennis. C: (#)
T: in the park C: (@)
T: after school C: (@)
T: every day C: (@)

(2) 選択 (Selection)

飯野著、清水改訂 (1985) によれば、選択は与えられた cue に従って、ある文型に挿入すべき適当な項目を選択する場合と、ある刺激 (stimulus) または場面に対して正しい応答文を選択する場合との2つがあるが、ここでは後者について説明する。

[例] T: Masao likes music.	C: (#)		T: (S4)と指名。	S4: (@)
T: ? (question) (S1)を指名。	S1: (@)		T: (Class)	C: (#)
T: (Class)	C: (#)		T: What? (S5)と指名。	S5: (@)
T: (S2)を指名。	S2: (@)		T: (Class)	C: (#)
T: (Class)	C: (#)		T: (S6)と指名。	S6: (@)
T: Who? (S3)と指名。	S3: (@)		T: (Class)	C: (#)
T: (Class)	C: (#)			

3 おわりに

今回は、復習段階におけるパターン・プラクティスを取り上げたが、授業のどの段階に位置づけられるかによって、それぞれにふさわしい cue を考えることが必要である。生徒の発話の自由度を徐々に増していく工夫を体系化していく技法としてその本質を正しく理解し、言語の実際の運用につなげていきたい。

<参考文献>

飯野至誠著、清水貞助改訂。(1985). 『英語の教育—変遷と実践—<改訂版>』東京：大修館書店。

名和雄次郎、関典明共著。(1987). 『中学英語の指導技術<意欲を高める工夫と実践>』東京：ELEC (財団法人英語教育協議会)。

藤原陽子。(1998). 「Pattern practice 再考—その位置づけと今後の可能性—」『平成9年度山口市教育研究年報』山口市教育委員会、山口市教育研究会. pp. 141-142.

【謝辞】本授業を行うにあたり、金田道和教授 (山口大学) に貴重なご示唆とご助言をいただいた。記して謝意を表したい。

【付記】本稿は、平成12年度山口市教育研究会研究委託による研究の成果を報告したものである。